

子供の交通事故

はじめに

1980年には25%だった日本の15歳以下の子供の割合は2003年には15.7%と減ってきており、今後ますます少子化が進むと予想されています。将来を担う子供たちを交通事故から守ることは大変重要なことです。

今回のイタルダ・インフォメーションは、学校や家庭での交通安全教育に役立つよう、中学生以下の子供たちがどういう状況で事故にあっているのか、そして子供の事故にはどのような特徴があるのかをまとめてみました。

1 子供の交通事故状況

1-1. 人口、死者、死傷者数の推移

子供の死者数は年々減少しており、その減少傾向は人口のそれよりも大きくなっています。一方、1990年頃まで減少していた死傷者はその後増加に転じ、その後は増加傾向が続いています。これは子供が交通事故によって死傷する頻度が高くなっていることを示しています。

後増加に転じ、その後は増加傾向が続いています。これは子供が交通事故によって死傷する頻度が高くなっていることを示しています。

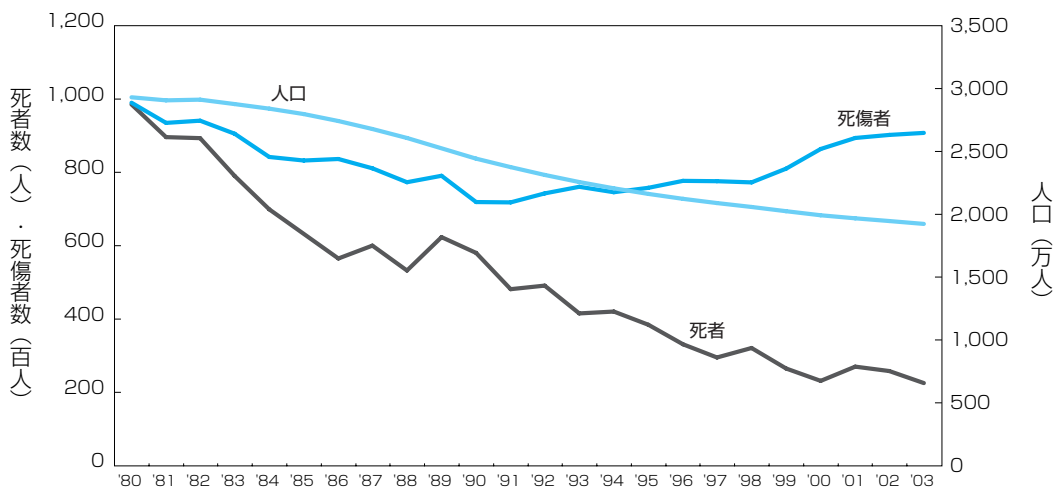


図1. 子供の人口、死者、死傷者数の推移

1-2. 状態別死傷者数

それでは子供たちはどういう状態で事故に
 っているのでしょうか。図2は平成15年中の子
 供の状態別死者、死傷者数を示しています。死
 者、死傷者ともに幼児が多いのですが、学齢が
 高くなるにつれ減っていきます。

子供の死者全体の約7割、死傷者の約6割は
 「自転車運転中（自転車に同乗ではなく運転して
 いた）」「歩行中」ですが、幼児の場合は親など
 の大人が運転する自動車に「同乗中」に死傷す
 る割合が他の学齢に比べて極めて高いという他
 とは少々異なる様相を呈しています。

小学校低学年は他の学齢に比べて「歩行中」
 に事故にあうケースが多く、死者の6割以上が

「歩行中」です。死傷者では「歩行中」、「自転車
 運転中」がそれぞれ4割弱を占めています。

小学校高学年から中学生では歩行中の死傷者
 が減り、「自転車運転中」が増えます。学齢が上
 がるにつれ自転車に乗っていて事故にあうケー
 スが増えていることがわかります。

このように状態別死傷者を見てみると、幼児
 は自動車同乗中に事故にあうことが多く、また、
 学齢期の子供は自転車運転中・歩行中の死傷者
 が高い割合を示していることがわかります。次
 章からは子供の判断と行動が事故要因の主体と
 なる「自転車運転中」、「歩行中」の事故につ
 いてその詳細を見てみます。

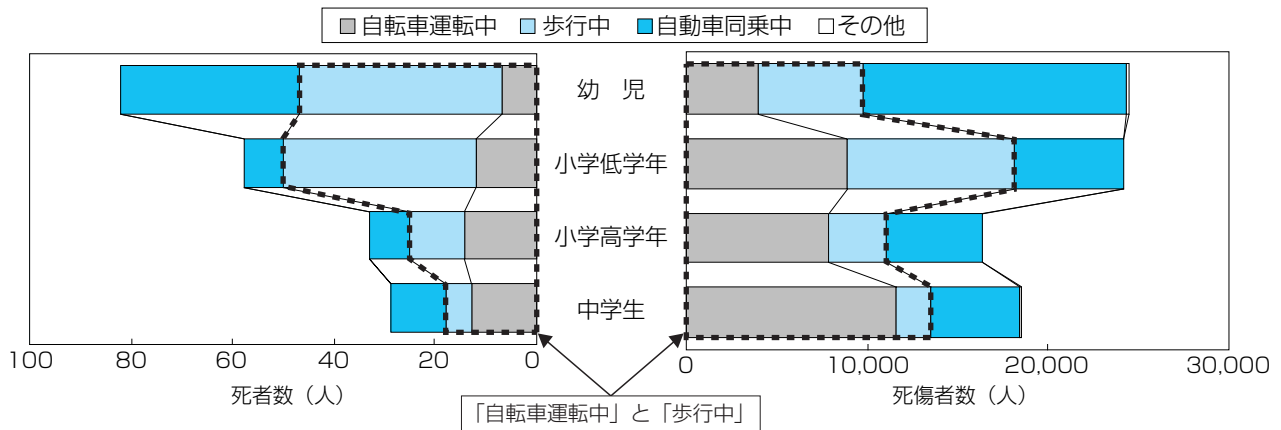


図2. 子供の状態別死者・死傷者数

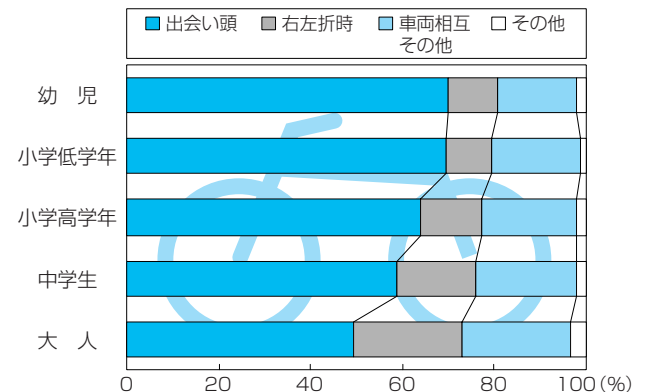
2 自転車運転中の事故

ここでは自転車運転中の事故について、こういった特徴があるのか平成15年の交通事故について見て
 みます。一般の死傷者と比較するために大人（20歳以上）のデータも併記します。

2-1. どんな事故が多いのか？

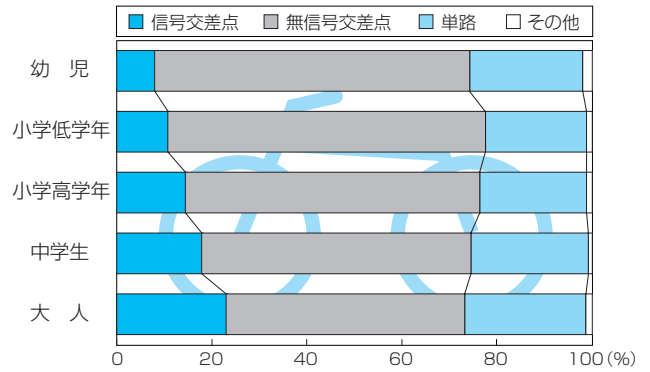
事故類型

大人に比べて出会い頭事故の割合が高くなっ
 ています。幼児と小学校低学年では約7割が出
 会い頭事故です。小学校高学年・中学生になる
 につれて出会い頭事故の割合が減り、右左折時
 の割合が増えていきます。



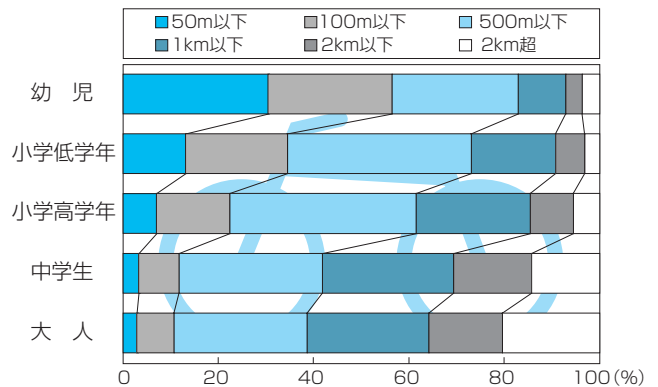
道路形状

どの年齢層でも交差点での事故が約7割を占めています。小さい子供ほど信号のない交差点で事故にあう割合が高くなっています。信号がない交差点での確な判断が出来ず左右から走行してくる車に衝突してしまうケースが考えられます。



自宅からの距離

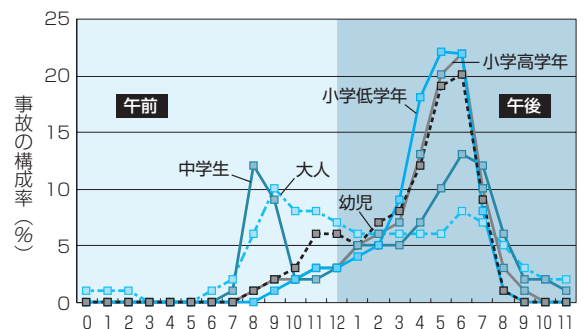
幼児の約半数、小学校低学年の約3割が自宅から100m以内の場所で事故にあっています。中学生になると大人の構成とほとんど変わらず、自宅から2km以上の場所での割合も高くなってきます。小さい子供ほど自宅のすぐ近くで事故にあっていくことがわかります。



2-2. いつ事故にあっていくのか？

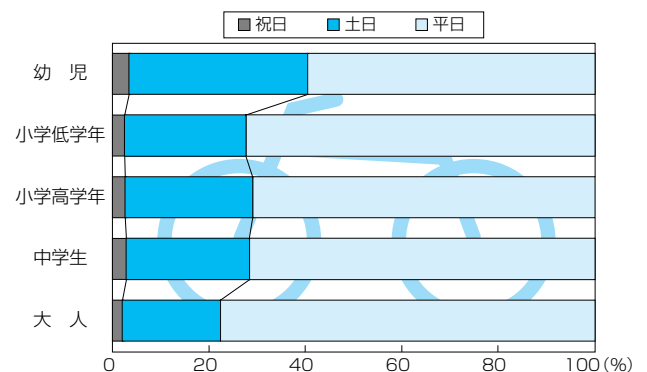
事故発生時間帯

幼児と小学生では午後3～6時の放課後の時間帯がもっとも多く、全体の半数以上を占めています。中学生には朝の7～9時の登校時と、夕方4～7時の下校時の2つのピークがあります。



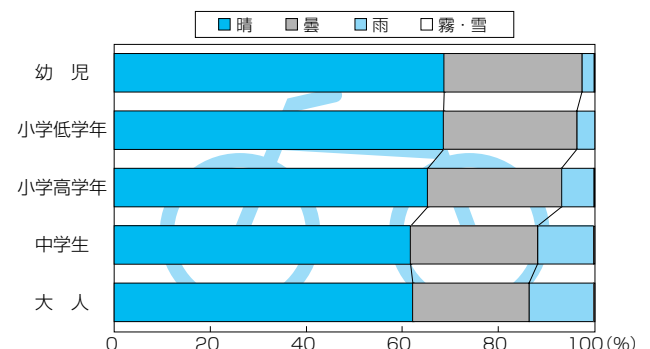
平日、土日、祝日

子供たちは土日・祝日に事故にあう割合が大人に比べ高くなっています。特に幼児では約4割が休日に事故にあっています。休日は子供が自由に動ける時間が長くなります。子供が外で遊んでいる時、大人は目を離さないように注意しなければいけません。



天候

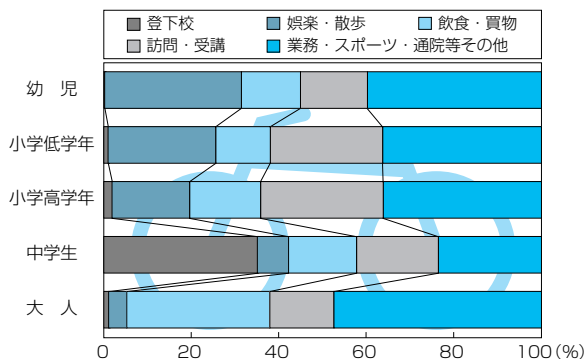
年齢が高くなるにつれ、雨の日の事故の割合が高くなっています。これは通学に自転車を利用することも関係しているのではないのでしょうか。雨の日は視界が悪くなり危険です。特に傘をさしての運転は非常に危険です。



2-3. 何をしていたのか？

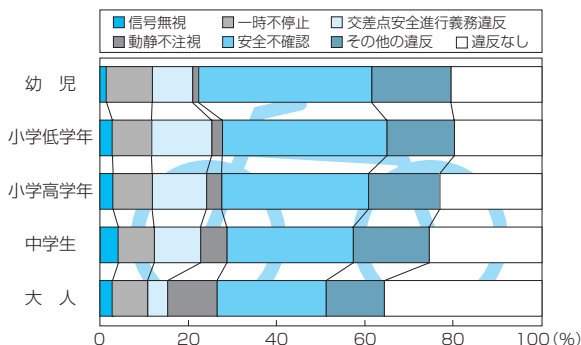
通行目的

幼児は娯楽・散歩の割合が高く、小学生では訪問・受講の割合が増えています。小学生になると習い事や塾などに通う機会が増えたり、友人宅に遊びに行ったりするためと考えられます。中学生は登下校が4割近くを占めています。



法令違反

子供たちは大人に比べて違反なしの割合が低いことがわかります。小さな子供ほど安全不確認の割合が高くなっています。子供たちに安全確認の重要性と方法をきちんと教えることが大切です。



2-4. 具体的な事例をみると

子供が自転車を運転していて死傷するのが最も多いのは中学生です。状況としては、登下校時に信号のない交差点で安全確認や一時停止をしなかったために、交差方向から走行してきた車と出会い頭に衝突するケースが多いようです。

以下に具体的な事例を紹介します。

【事例1】自転車で校門から飛び出して、乗用車と衝突

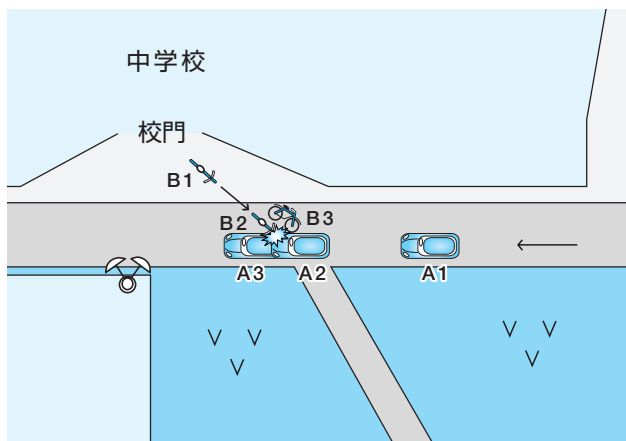
下校時、中学3年生の男子生徒は自転車に乗って校門を出る際、道路の向こう側に友人を見つけました。後を追いかけて左右の確認をせずに道路を横断したところ、左側から走行してきた乗用車と衝突しました。

男子生徒は友人を追いかけることに意識が行ってしまい「道路に出る際には左右の安全を確認する」という基本的なことを忘れてしまいました。乗用車の運転者は校門があることは知っていましたが、生徒は校門を出る時には左右を確認するだろうと思い、あまり注意を払っていませんでした。

校門の左右の扉は高く見通しが良くありませんでした。学校側は、道路に飛び出すことがないように校門を出る際には左右の安全を確認するよう教えることが必要です。

場合によっては、校庭内から校門までは自転車に乗らず、安全確認の後に乗るといような

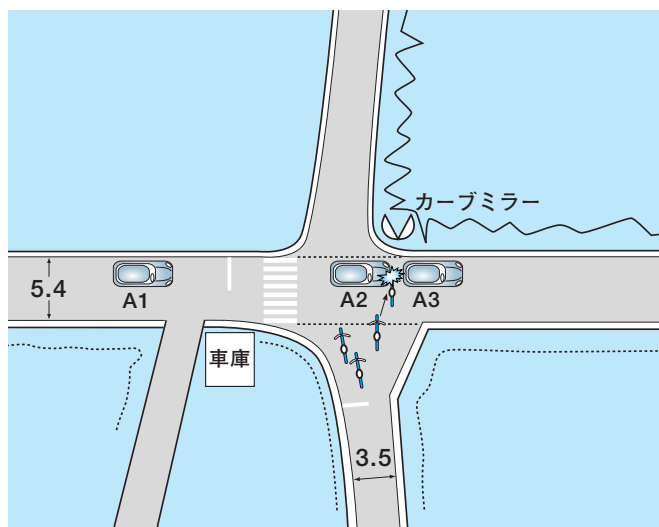
ルールを作るのも一つの方法です。壁の上部を金網フェンスなどの見通しの良いものにして交差する交通が見通せるようにするなどの方策もあるのではないのでしょうか。



【事例2】友達とのおしゃべりに夢中になり交差点に進入

中学2年生の男子生徒は下校時、自転車で友達2人と並列走行していました。見通しの悪い交差点に差しかけた際、友達2人は交差点手前で一旦停止しましたが、男子生徒は会話に夢中になり、そのまま交差点に入ってしまった。ちょうどそのとき左から走行してきた乗用車と衝突しました。

この交差点にはカーブミラーが設置されていました。しかし、男子生徒は会話に夢中で周囲の状況に全く注意していなかったようです。自転車でしゃべりながらの並列走行は非常に危険です。自転車は1列で左側を走行し、周囲の状況に注意するように教えることが大切です。



歩行中の事故

次に歩行中の事故について自転車と同じように、平成15年の交通事故について見てみます。一般の死傷者と比較するために大人（20歳以上）のデータも併記します。

3-1. どんな事故が多いのか？

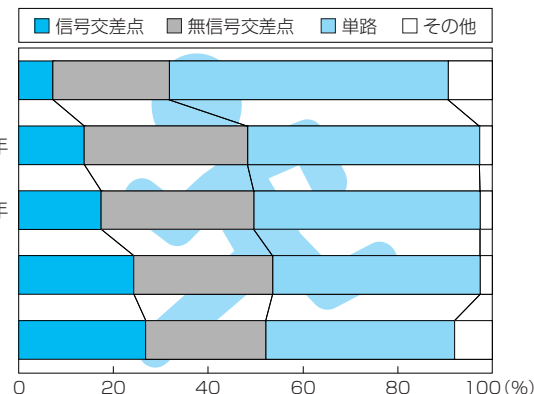
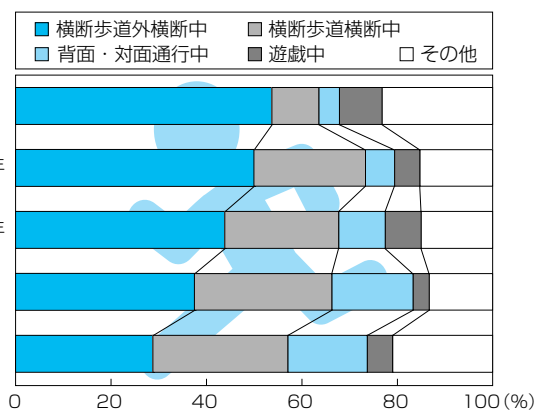
事故類型

どの年齢層をみても、約6～7割が横断中の事故です。年齢が低くなればなるほど横断歩道以外の場所を横断して事故にあう割合が高くなっています。幼児は横断歩道横断中の事故の割合が他の年齢の半分以下となっています。

道路形状

幼児では単路の割合が高くなっています。小学生以上では交差点と単路がほぼ半々ですが、年齢が低くなるにしたがい信号交差点の割合が低くなっていることがわかります。

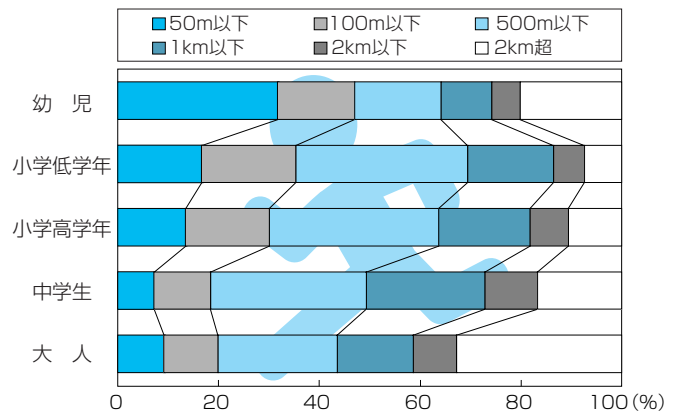
自転車運転中とは違い、交差点事故の割合は半数以下となっています。



自宅からの距離

幼児の4割、小学生の約3割が自宅から100m以内の場所で事故にあっています。また、年齢が高くなるほど、自宅から離れた場所で事故にあう割合も高くなっており、行動範囲が年齢とともに広がっていくことが推察できます。幼児は2km超の場所での事故の割合が高いですが、これは、大人に連れられて遠出をし、事故にあっていているケースが考えられます。

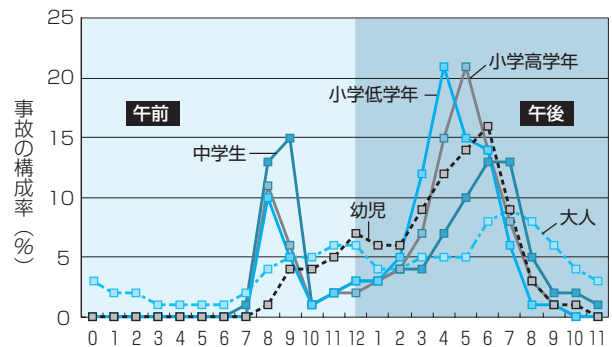
自転車運転中よりも自宅に近い場所で事故にあっています。



3-2. いつ事故にあっているのか？

事故発生時間帯

幼児は午後3～6時の時間帯がもっとも多くなっています。小学生は午後2～6時で半数以上を占め、低学年の方がやや早い時間帯にピークがあります。また、自転車運転中と異なり朝7時台にもピークがあり登下校時、放課後に事故にあいやすいことがわかります。中学生は朝の7～9時と夕方5～7時に2つのピークがあり、登下校の時間帯に事故が多いことがわかります。

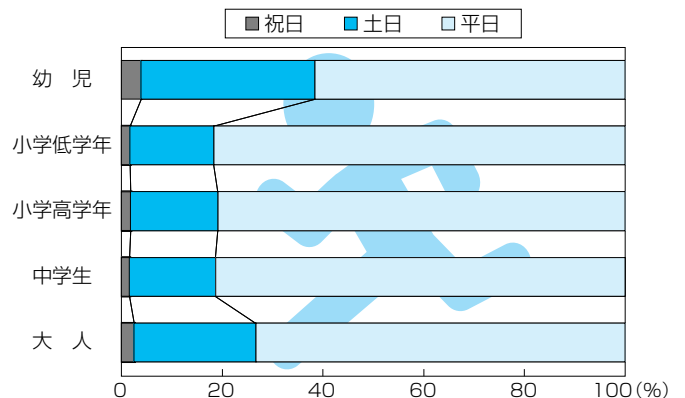


平日、土日、祝日

幼児は土日・祝日に事故にあう割合が高く、約4割が休日に事故にあっています。

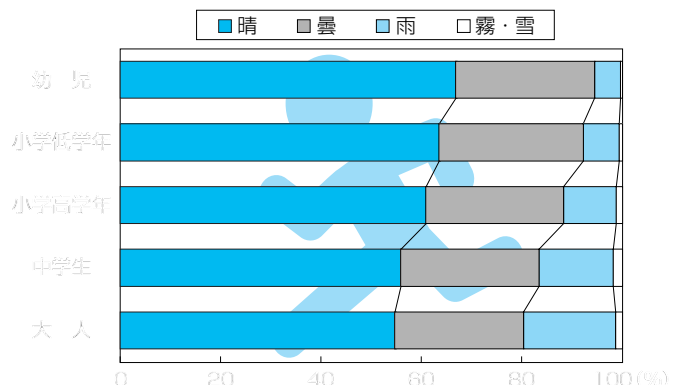
一方、小中学生は大人に比べ、土日・祝日に事故にあう割合が低くなっています。

小中学生では自転車運転中よりも平日の事故の割合が高くなっています。



天候

自転車運転中と同じく、学齢が高くなるにつれ、雨の日の事故が増えてきます。雨でも外出する機会が多くなってくるものと思われます。

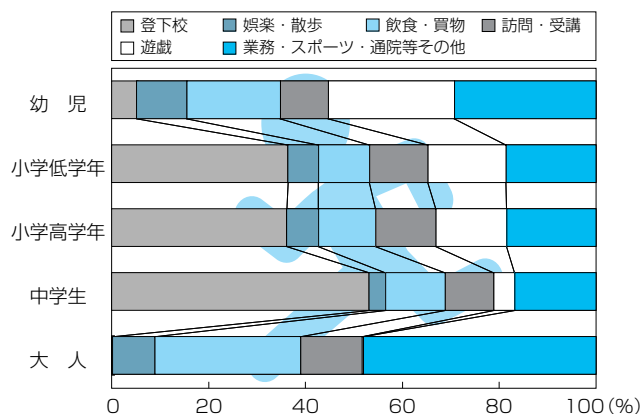


3-3. 何をしていたのか？

通行目的

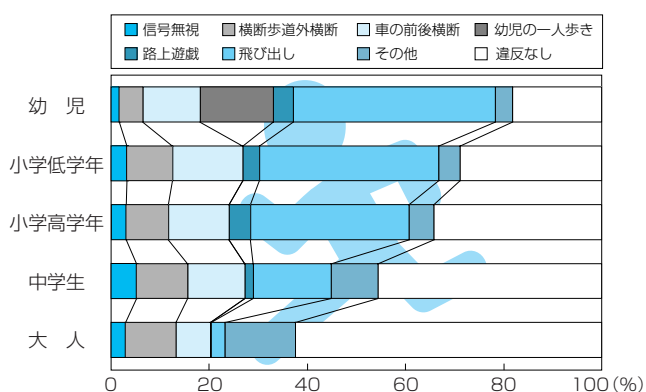
幼児は遊戯中の割合が一番高く、次に飲食・買い物となっています。小学生では登下校中の割合が一番高く、次に遊戯、となっています。中学生では半数が登下校時に事故にあっていることがわかります。

自転車運転中では見られなかった、小学生の登下校と、幼児・小学生の遊戯中が大きな割合を占めています。



法令違反

小さい子供ほど違反なしの割合が低く、飛び出しの割合が高くなっています。交通ルールを知らないために結果的に違反してしまうケースが多いと考えられます。家庭や学校での交通安全教育が必要と思われます。



3-4. 具体的な事例をみると

子供の歩行中の死傷事故がもっとも多いのは小学低学年、次いで幼児です。状況としては、午後3時から5時頃、自宅のそばで遊んでいる時や下校時に道路に飛び出したことにより事故にあっているケースが多いようです。

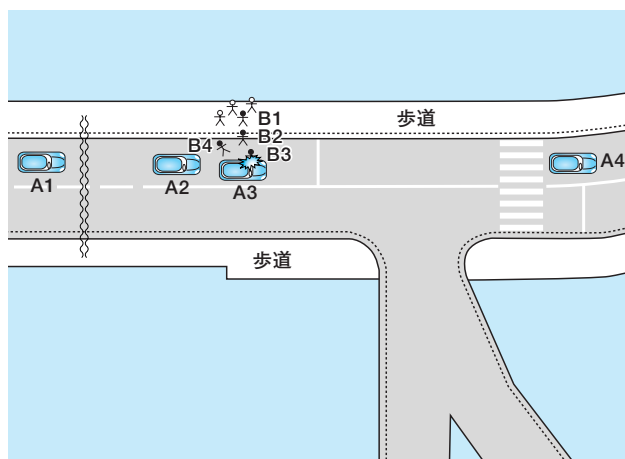
以下に具体的な事例を紹介します。

【事例3】 友達の制止を聞かずに飛び出し乗用車と衝突

小学2年生の男の子は下校途中に、友達数人と歩道上で立ち話をしていました。彼は道路の反対側にある祖父の家に行くことを突然思いつき、友達の制止の声を聞かずに駆け足で道路に飛び出し、右側から走行してきた乗用車と衝突しました。

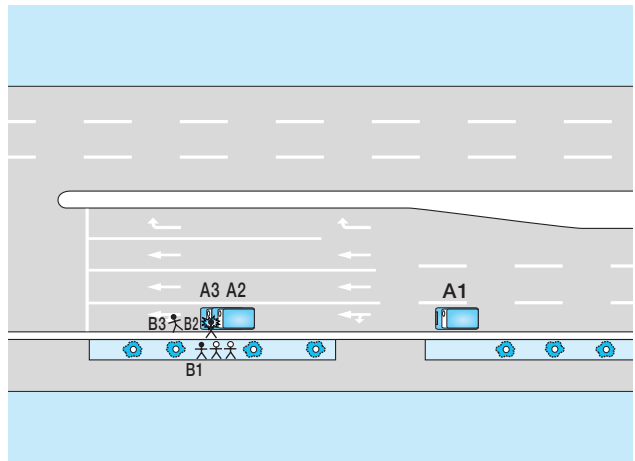
乗用車の運転者は歩道上の子供たちに気づいていましたが、横断する様子はないと、あまり注意していませんでした。

この男の子は横断するときには必ず行わなければならない左右の安全確認を忘れてしまいました。子供には道路を横断しようと思った時に必ず左右の安全を確認し、横断歩道があれば横断歩道を渡るように教える必要があります。



【事例4】道路を遊び場にしていて軽貨物車と衝突

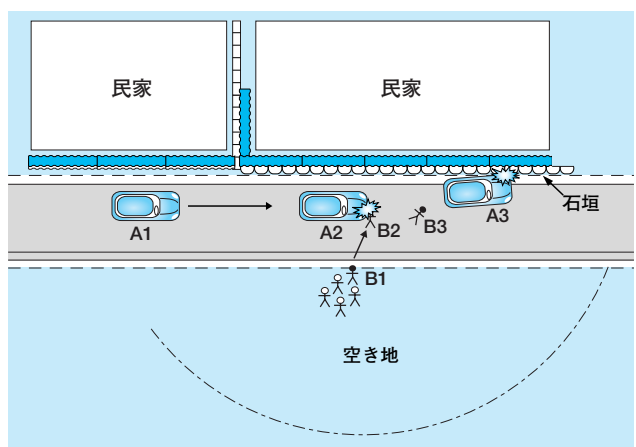
小学1年生の男の子は友達と広場で遊んでいて車のおもちゃを見つけました。男の子はそのおもちゃを道路に置いて、走ってくる車に飛ばされるのを見ようと提案し、3人で道路の植え込みまで行きました。男の子は道路右側から車が走ってくるのを確認しましたが、先に道路に出ておもちゃを置いて戻れると思いきや道路に飛び出しました。軽貨物車の運転者は道路の左側歩道上に子供が3人いたので、危ないと思いクラクションを鳴らし、減速して通過しようとしていました。しかし、目前に子供の一人が飛び出してきたので避けることが出来ずに衝突してしまいました。



【事例5】遊びに夢中になり道路に飛び出し乗用車と衝突

小学1年生の男の子は道路脇の空き地で友達数人と遊んでいました。そのうち遊びに夢中になり、駆け足で車道に飛び出したため、左側から走行してきた乗用車と衝突しました。乗用車の運転者は子供が遊んでいることに気づきましたが、減速などの予防措置をとらずに走行したため、急な子供の飛び出しに対応できませんでした。

幼児や小学生に対しては、道路やその付近での遊びは危険であり、さらに何故危険なのかを具体的な例や実際の交通の場面で日ごろから繰り返し教えることが大切です。



まとめ

事故にあった子供たちのうち、幼児の約4割、小中学生の約7割が「自転車運転中」「歩行中」でした。その要因としては、

- ・信号のない交差点での安全確認を怠ったため
- ・横断歩道以外の場所を横断したため
- ・道路に飛び出したため

が大きな特徴としてあげられます。

通常私たち大人は交通環境の中で複数の情報をとらえ、瞬時にそれらを判断し行動しています。正しい判断と行動をしていれば事故は防げます。しかし、子供たちはまだ思考・判断能力の発達途上であり、小さい子供ほど、1つのものに注意が向くと周りのものが目に入らなくなる傾向があります。

子供たちの周囲にいる大人は「止まる」「見る」「待つ」習慣を身につけさせ、正しい判断と行動の仕方を教えていかなければいけません。子供の理解力にあわせて、具体的な言葉や対象となる場所で繰り返し教えるとともに、日常生活においては大人がお手本を示すことが大切です。

- 本パンフレットは、平成16年用寄附金付お年玉付郵便葉書等寄附金で作成しました。
- お問い合わせ先：(財)交通事故総合分析センター TEL 03-3515-2525 FAX 03-3515-2519
ホームページのアドレス：<http://www.itarda.or.jp/> Eメール：koho@itarda.or.jp